



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『大和物語』 歌話構成の手法
Author(s)	小野, 芳子
Citation	国語国文研究, 143, 1-17
Issue Date	2013-07-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93187
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_143_01-17.pdf



『大和物語』 歌話構成の手法

小 野 芳 子

一 はじめに

『大和物語』は、現在、ひとつひとつの「章段」を単位として読まれている。読み取りや研究の便宜であつた章段分別がテキスト上になされていることにより、歌話が独立した状態のものだとする前提が定着している。しかし、本来は章段の分別はない。現存する諸本には、付載説話を除き、歌話の順序に大きな異同のあるものがなく、入れ替えが可能なものとされていない状態であり、完全に独立したものかは疑われる。近年、ことばのありようから章段には連続する様相がみられることを考える研究がなされてきている¹⁾。

歌話の素材は「歌語り」という口承的営為だとされるが、それも章段が独立したものであるという前提と相関している。口承的な「歌語り」とは別の、書かれた文学作品である「歌物語」の性格が、これまで十分に議論の俎上に上って来なかつた感がある。

また、歌話は、「あはれ」と言われる悲哀を核とするような狭い情緒の世界を描いているという先入観が江戸時代の注釈者たち以来続いている。情趣的な貴族生活のなかでの実人生の実感を写したものであるとして読み取られ、歌話の根拠に史実があるとの前提から、膨大な史料との照合がなされてきた。それに対して、表現に即して物語を読み取ると、地の文は歌のことばから発想されて強い対応関係をもつて整合しており、主題は、実は笑いの要素を多く含んでいることが明らかにされている²⁾。

第二部とされる、古い時代設定の章段群については、歌話や歌の主題、人物関係の連続性のみならず、語彙の連関、同語・同音の反復・連続が章段構成の重要な方法であり、歌句を改変したり地の文で調整したりして連関をつくっており、現行の章段の区分だけではとらえきれぬものではないことを旧稿において論じた³⁾。小稿は、いわゆる第一部の、主として四二段から五四段とその周辺を一例として、歌話の結構の特性、複数の歌話の構成方法を考察するものである。

る。

なお、小稿は、『大和物語』を現行の章段で分断することには疑義を呈するものであるが、論証の都合上、歌話の単位としての「章段」の語と、周知されている章段番号を使うものとする。また、本文を逐次掲げていない場合がある。任意のテキストにて参照されたい。

二 『大和物語』歌話結構の特性

——四六段を例として

「四六段」⁴

平中、閑院の御にたえてのち、ほどへてあひたりけり。さてのちにいひおこせたる、

うちとけて君はねつらむ我はしも露のおきみてこひにあかしつ女、返し、

しらつゆのおきふしたれをこひつらむ我は聞きおはずいそのかみにて

はじめに、解釈の基本となる和歌技巧を確認する。懸歌「うちとけて…」の技巧は、「露の」は「おき」の序、「おき」は、「置き」と「起き」の掛詞、「こひ」は、「恋ひ」と「日」の掛詞、「置き」「ぬ」「日」は「露」の縁語、「つゆがおく」で涙の比喩。「日」は、配列上、掛詞であることが補強されるが、それについては後述する。「しも」は、強意の助詞と「霜」の掛詞とする注釈書が優勢であるが、『抄』⁵「われはしもといふしもは助字也」、『虚静抄』「我はしものしも此歌

にては心なし」とあり、現代注でも、『鑑賞』『注釈』は、この掛詞をとらない。しかし、「と（溶）け」「お（置）き」「ぬ」「ひ（日）」を縁語として、「霜」の掛詞があると読み取ることができる。

一方、返歌「しらつゆの…」の技巧は、「しらつゆの」は、「おき」の序、「おき」は「置き」と「起き」の掛詞、「こひ」は「恋ひ」と「日」の掛詞で、懸歌に完全に対応した技巧である。「おきみて」を「おきふし」と言い換えて、どうせ、夜通し起きていたのではあるまい、と揶揄している。

ところで、返歌の主眼は「いそのかみ」の解釈にある。この語について、諸注釈は、「布留」にかかる枕詞をもってその指し示す語に代わり、「古」「古者」、すなわち「捨てられた女」を表すとしている。ただ、この歌話において、絶えてのちほどへたが、再び逢ったというのに、その部分を除いて、自分を「捨てられた女」というのは、地の文の説明する情況とびつたり合致しない。「いそのかみふる」の成句が使われた恋の有名歌に、「いそのかみふるからをののものとがしは本の心はわすられなくに」（『古今集』 雑上 886 題しらずよみ人しらず、「いそのかみふるの中道なかなに見ずはこひしと思はましやは」（『古今集』 恋四 679 題しらず 紀貫之。「貫之集」694、「いそのかみふりにしこひの神さびてたたるに我はいぞねかねつる」（『古今集』 雑体 誹諧歌 1022 題しらずよみ人しらず。「拾遺集」重出 恋四 862 作者「藤原忠房」五句「ねぎぞかねつる」⁶）がある。『古今集』679は、「ふる」には古い昔なじみの、「中道」には二人の仲という意が掛けられていると解すべき⁷とされる。これら「古今集」歌はいずれも、古馴染の恋

人を性懲りもなく恋う、という内容であり、「いそのかみ」の一語で表されるのは、「古馴染み」である。そして、それが、地の文の綴る、よりをもどしたという情況設定に適している。当該歌の「いそのかみ」は、「古」の言い換えではなく、後の本歌取りや地の文の引歌に近い、先行有名歌の引用の技巧を駆使したものである。

『大和物語』の撰歌には、先行歌の引用や換骨奪胎の表現に重きを置く方法意識がある。特定の歌語は主に『古今集』、また古歌の知識をもつて充てている。「いそのかみ」の語を含む一対の贈答があり、歌話を地の文と歌で結構する述作者が、それに適した情況を設定しようとして、「たえてのち、ほどへてあゝ」^さとしたするのは、この語が「捨てられた女」ではなく、『古今集』歌で使われている「古馴染み」だという理解に基づいているからに他ならない。

懸歌は、やむなく通えない切なさを装った内容である。返歌はこの欺瞞に反発したもので、本来に來るつもりがあるのなら、古馴染みなのだから障礙はないはずだ、この期に及んで來ない言訳をするのに通い初めたばかりのような哀切さを演出するのはかえって滑稽というものだ、と切り返したものである。返歌の鮮やかな切り返しがあるから、平中の歌は、ロマンチストを氣取った、ナルシスティックなものだ、というストーリーが成立する。『大和物語』『平中物語』を通じて、ロマンチストであるゆえに現実にうまく対処できず、結果として「烏滸」を演じざるを得なくなってしまうという平中像がある。そういう間の悪さを有つものとして平中が登場する当該の歌話、六四段、一〇三段は同じ造型意識の上にある。

さらに、この歌で、諸注に指摘されてこなかったが、懸歌が哀切

さをアピールする「しも」の縁語仕立てであるのに対して、返歌の「いそのかみ」の句に「かみ」という対義語を仕込んで表現を転覆させているという技巧がある。この返歌の技巧によって、懸歌がまったく意識して使っていなかった、「しも」が「霜」とともに「下」とも掛詞になる、という技巧が付け加えられている。これと同様に、懸歌が単に「露」というのに対し、返歌が「しらつゆ」と表現を替えているのであるが、この「白」が使われたことによって、懸歌の「あかしつ」の「あか」は、色の「紅」の掛詞となる。つまり、返歌の語に揚げ足を取られて逆転されたことによって、懸歌の技巧がそれ一首として意図した以上に、より多様に変容しているのである。男女の恋の歌の応酬には、相手の表現への反発、逆転をするという基本的な方法がある。それに則って、四六段は、捨てられた女のあはれの物語ではなく、歌の技巧に意外な驚きがある、女の切り返しの物語である。

「しも」と「かみ」の対応が述作者の企図したところであることは、この対応が、一組の贈答歌だけに表れるものではないことから補強される。「しも」あるいは「した」を「かみ」や「うへ」の対義語と対応させる歌話は、四二段、四四段、五三段に断続的に見られるのである。まず、四二段に、「又、この人の御もとに^{みもと}よみたりける あさばらけ我がみはにはのしもながらにをたねにて心おひけむ」とある。ここには、直截的な「かみ」の語はないが、敬語によって身分の高い婦人ということを示す地の文の内容が、歌の「しも」と対応している。四四段では、「かくのみよからぬことの、あるがうへにいできければ のがるともたれかきざらむ濡れ衣あめのしたにしす

まんかぎりは」と、地の文の「あるがうへ」と歌の「あめのした」が対応している。前二章段とは別の人物を登場させ、わざわざ新たな人間関係を作つて、それを「あるがうへ」と表現したもので、それによつて、女に追われ続ける作者多しうの歎息を出家「らしからぬ」滑稽譚として演出しているのである。五三段「陽成院にありけるさかのうへ」とほみちといふ男、同じ院にありける女、さほることありとてあはざりければ 秋の野をわくらむむしも我ごとやしげきさはりにねをばなくらん」では、「うへ」は、地の文の作者名「さかのうへ」の中にあたかも隠題のように含まれ、「しも」は二句目に隠題の技巧で組み込まれている。意表を突く技巧であるが、それだけが突出して奇矯なわけではなく、歌が「そんなに頻繁に月の障りがあるとは泣けてくる」という猥雑な俳諧歌で、技巧は内容に同調しつつ、歌話連続の諧謔のしかけを施すものである。隠題の歌や人物名が章段連続に関与する例がほかにもみられていることについては後述する。

この一連の歌話群では、「うへ」「かみ」と「した」「しも」の対義語あるいは対立概念をさまざまな意味あいと技法で分散配置している⁽¹⁹⁾。これらにおいては、地の文の内容や語、作者名が完全に歌に対応しているために、歌話を結構する意図のなかには強いことばの対応への興味があつたことが明らかとなつてゐる。そうしたなかにあつては、歌の語も、対応の必要によつて選択的に採用されたもの、さらには、創作されたものと考えることが可能である。

四六段の贈答の核心として説明した懸歌の「しも」がそれに当たる。「しも」は、音数を整える役割を果たしているが、意味の上で不

可欠なものとはいえない。「霜」との掛詞を認めない注釈書もある通り、「と」(溶)けて」を縁語と認定して辛うじて掛詞が成立しているが、この縁語は例歌が少なく、一般的なものではない。「うちとけて」は、通常、親密になることをいう語だが、ここではそういう読み取りを成立させる語がほかに使われておらず、この句がこの歌の表現に十分に合致したものとなつていない。訪れなかつた日に相手がつつすり寝ていて鈍感だ、という内容は、一般的な恋歌の常道とは異なる。「しも」は、不自然で晦渋な様相を呈している。それゆえに、「しも」は、返歌「いそのかみ」の「かみ」と対応させるために、『大和物語』述作者の作為によつて選び取られ組み合わされたことばなのではないかと考える。ここに見られるように、『大和物語』所収歌は、一見、ことばの使い方が乱れていたり、一貫した解釈が難しかったりする場合があつたりするが、それは、古歌の引用や、技巧の対応、地の文との照応があつて歌話が落着くため、また、前後数章段との対応により配列の妙を表現するためにことばが選ばれてできたからである。

『大和物語』の歌話の結構には、従来考えられてきたよりも、主知的に、陽性な作話意識がある。歌話の目指すところは、知識と機知に基づき、地の文と歌が効果的に対応することでの知巧的な落着にある。歌話を落着させる方法は、多くは地の文で提示した緊張状態を歌の表現の巧みさで解きほぐし、落ちをつけることにあるが、地の文でさかのぼつて説明する落着(二三八段、登場人物の行為による落着(四一段)などがある。いずれも、ことばに意外性があるが、即妙であつて、発想の逆転で驚きをもたらす方法になつてゐる。そ

れと同時に、周辺歌話の連関がその落着を明瞭にしているのである。

三 短小章段の位置づけ

—— 四七段を例として

〔四七段〕

陽成院の一条の君、

おく山に心をいれてたづねずはふかきもみちのいろをみましや

四七段は、『大和物語』の中でも最短章段のひとつである。研究史では、この章段を例に引き、短小章段でも、一話として独立して成立していると考えるのが定説である。たとえば、「歌語りとなる歌の詠者が、その享受者の間で有名であればあるほど、歌を詠むに至る詠歌事情は、その人物に付随する要素、予備知識として暗黙裡に了承され、歌と人物を提示するだけで歌語りとして成立し得る場合もあったと想像される。…この歌の詠者「陽成院の一条の君」を提示することで、少なくともこの歌の背景にある詠歌事情を享受者に想起させ得たと考えなければ、歌と詠み手を掲げたのみで一章段となり得ている事実は理解できないと思うのである。」¹¹⁾「陽成院の一条の君」と名前だけを出しても歌語りになり得る背景を持っていた。特に一条の君が文学の場、ロマンスの場に於て有名だったのが陽成院サロンであったことを物語っている。¹²⁾などと説明されている。

『大和物語』の短小章段は、前の段の人物、内容を継承するものが多い(三一、三三、五九、七九、一〇二、一〇七、一一〇、一二三

段など)。また、人物を先取りするものもある(二一八段)。これらは、現行の章段としては独立しているが、本来は人物、内容で前後に付随したものである。しかし、この四七段は、人物、内容とも、前段を継承してはいない。

この四七段の前後の章段との連続について『旧全集』は「四十六段から六十九段までは恋を内容とする章段群。『うわべだけを見て、真実を知ってくれよう』としない男におくった歌である。表面的な見方と真実の心の相違を扱った段が続くので、その連関によつて置かれたのであろう。」とする(『新全集』も大きな変更はない)。「注釈」は、「前段の閑院の歌は、平中の薄き心をとがめた。本段も相手の心の薄さをとがめる。その似かよいで、本段は前段に続くのである。」¹³⁾といい、「学術」は「第四十六段は「絶えて後、ほど経て逢ひたりけり」とあり、次の第四十八段は「久しくまゐり給はざりけるに」と、いずれも「久しく逢っていない」状況の中で詠まれている。この第四十七段も、第四十六段同様に、しばらくやって来ない男に對しての歌と理解できよう。」とする。いずれも、主題に関連性があることが章段配列の基準となつているとしている。

右のような諸注釈の考えは、この「ずは…まし」を推量とし、言い寄ってきた男をなじる、たしなめる歌だという解釈に基づいている。たとえば、『注釈』の訳は、「奥山で熱心に捜さなくては、深い紅葉の色が見られましようか、——私についても同じですわ。」とする。諸注、解釈に大差はない。¹³⁾しかし、「ずは…まし」は、一般的に反実仮想を表す。それに従つてこの歌を現代語に訳すと、「奥山に、熱意をもつて尋ねなかったならば、深い紅葉の色を見ることができ

ただらうか、いやでできなかった」となる。主体が、奥山に心を入れて尋ねたから、深い紅葉の色を見た、という事実を、なにかしら主観的に強調しているのである。これまでの解が当を得ないものである以上、恋の歌と確定できず、前段との直接的な「似かよい」を見て取ることはできない。

それでは、この四七段歌は、なぜここに配列されたものであるのか。この歌話は、前段、前々段、直後の段との共通性を見出すのは難しいが、四二、四三、四四段、四九段、五〇段、五二段所収の歌とは、語彙を共有している特徴が見られる（各章の歌の本文は次節に挙げる）。四二段から四四段では、もともと比叡山の僧である系しうが、深い山に入るのか入らないのか、いつ入るのか、どこに入るのか逡巡することが語られる。五〇段では、比叡山に入ったかいせんが、雲でもないのに山にくっついていてわが身を嗟嘆する。その間にあって、四七段の歌にことさら地の文が付与されていないということによって深い山は比叡山という連続的なイメージがとぎれるのを避けながら、女性的一条の君が、奥山に入って深い紅葉の色を見た、と、あたかも、比叡山の奥で深い宗教的な境地に達したと宣言しているかのような効果を生んでいる。出家は諦観を得られず、女が奥義を獲得するというのは、『大和物語』得意の、読者の固定観念を裏切る、「らしからぬ」物語であり、それを、歌話の配列によって成立させている。この歌が、ことばの連関上、さまざまな方向性への結節の役割を果たしていることはさらに後述する。歌語りとして、作者名と歌があれば背景がわかったものかどうか、現在では検証が困難だが、『大和物語』の歌話の連続の中に、ことばの連関でこ

の章段の位置づけが可能だといえる。

四 和歌技巧的表現による歌話構成の手法

『大和物語』の歌話は、個々には完結しており、歌話には独立性があるように見えていて。しかし、第二、三節で示したように、いくつかの歌話の歌と地の文にわたって語に共通性があり、ひとつの歌話の読み取りが、他の歌話のことばの対応関係によって補助、補強されるような作為がなされている。主題や人物の直接的な連続を考えるとときに、どうしても章段の連続が明確にならない不可解を解くひとつの鍵は、ことばの連関にある。

章段連続の要件について、「同語（同音）⁽¹⁹⁾ 反復」「縁語」「対義語」などの連鎖であることが報告されている。これらは、一首の中に複数の要素があったり、ひとつの語が異なる連関に関与するなど、すつきり分類しきれるものではないが、主要な連関要素である。四六、四七段の周辺章段の連続と配列を探るうえで、歌と地の文について、これら同語、同音語、縁語、対義語の連関を確認する。中心的に反復する語を「しも」「山」とし、連関すると考える語を、「しも」について二重線、「山」について実線で示す。それ以外の同語、同辞反復は破線で示す。縁語は、かならず掛詞を兼ねる技巧の範疇に収まるものではなく、類義語、修飾語を含む。

〔四一段〕

地 よろづ よぶこ 四人 世の中

※いひとつも世ははかなきをかたみにはあはれといかで君にみえま

し

地 よよとなむなきける

〔四二段〕

地 とかく世の中にいふこと

①里はいふ山にはさわぐ白雲のそらにはかなき身とやなりなむ

②あさぼらけ我がみにはのしもながらなにをたねにて心おひけむ

〔四三段〕

③まがきする飛驒の匠のたつき音のあなかしこましなぞや世の中心

地 行ひしに、深き山にいりなむとす、深き山にこもりたまひぬ

④なにばかり深くもあらず世のつねのひえをとやまと見るばかりなり

〔四四段〕

地 よかはといふところ

〔四四段〕

地 山へのぼりたまふべき日は、まだ遠くやある。

⑤のぼりゆく山の雲の遠ければ日も近くなるものにぞありける

地 よからぬことのあるがうへにいできければ

⑥のがるともたれかきざらむ濡れ衣あめのしたにしすまなかざりは

〔四五段〕

⑦人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな

〔四六段〕

⑧うちとけて君はねつらむ我はしもつゆのおきみてこひにあかしつ

⑨しらつゆのおきふし誰をこひつらむ我は聞きおはずいそのかみに

て

〔四七段〕

⑩おく山に心をいれてたづねずは深きもみちの色を見ましや

〔四八段〕

地 里にまかりいでたまひて

⑪おほぞらをわたる春日のかげなれやよそにのみ見てのどけかるら

む

〔四九段〕

⑫ゆきて見ぬ人のためにとおもはずはたれかをらまし我やどのきく

⑬我やどに色をりとむる君なくはよそにもきくの花を見ましや

〔五〇段〕

⑭雲ならでこだかき峰にゐるものはうき世をそむくわが身なりけり

〔五一一段〕

⑮おなじ枝をわきて霜置く秋なれば光もつらくおもほゆるかな

⑯花の色を見てもしりなむ初霜の心ゆきては置かじと思ふ

〔五二一段〕

⑰わたつみの深き心はおきながらうらみられぬるものにぞありける

〔五三一段〕

地 坂上遠道

⑱秋の野をわくらむむしも我ごとやしげきさはりにねをばなくらん

〔五四一段〕

地 人の国

⑲しをりしてゆく旅なれどかりそめのいのちしらねばかへりしもせ

じ

このように、四六段、四七段だけを解釈しようとする「しも」や「山」に連関があるということを見出しにくい、歌話群を通観すると、この二章段が多くの連関要素に囲繞されていることが看取れる。

この歌話群のうち、①から⑥までは歌の詠み手が「ゑしう」で連続しており、三章段に分別されているが、高貴な女性達との関係や人里暮らしから離脱し切れない内容でひとつのまとまりである。一方、「先帝」に関連した章段が四五、四八、四九、五一、五二段である。四五段に歌を贈られる相手として「先帝」という人物が紹介され、四八段以下に詠み手となっている。このような、人物を歌話の背景から登場させる漸層的な導入は、一三七段から一四〇段までの故兵部卿宮、一七段から一九段の故式部卿宮、一五九段以降一六六段までの在五中将閑連章段に見られている方法である。「先帝」とは誰かについて、注釈書の大勢は、四五段は醍醐天皇、⑪以下は宇多天皇とする。だが、「先帝」という同一の呼称は同一の人物を指しているとするのが合理的であり、四五段の醍醐天皇は兼輔との関係から動かし難いので、いずれの章段も醍醐天皇のことを語っていると考えられる。「先帝」という人物に関連する章段だけ連続させると、主題も、後宮の人間関係や親子の真情でまとはるはずだが、それだけが配列基準ではないことがわかる。⑦から⑱は詠者が異なっているが、同語、同辞の反復、技巧の共通、話題の継起と反転という連続性があるのである。

「しも」はこの歌話群全体の連続を作るキーワードであり、「うへ・かみ」と「した・しも」の地口的対応が②⑥⑧⑨⑱にみられるのは

前述したとおりである。複数章段にわたり、同語、同音語、類義語かつ対義語として反復しつつ、意味、用法を転換し、主題に関わったり技巧の隠し味となったりしながら融通無碍に組み合わせられて、歌話配列の要件となっている。その他にも、⑮⑯に「霜」、⑲に助詞「しも」の同語、同音語反復がある。⑲は助詞「しも」があるために、歌の悲壮感を削ぐような微妙な言い回しとなつて、歌話に諧謔味を添え、先行歌話と連続している。この同語、類語の反復と技巧の変奏が複数歌話で強調されていることから、これらは主題と無関係に発生した語り口の生んだ連鎖ではなく、ことばの諸語に目的性があるということが考えられる。

⑱のように、隠題の歌でも、ことばの連関で配列に関わっている例はほかにもみられる。たとえば、五八段の「なとりのみゆ」の隠題歌「大空の雲のかよひ路みてしかなとりのみゆけばあととはかみなき」について、二章段を隔てて六一段に、人物や主題は全く異にするが、「世の中のおさき瀬にのみなりゆけばきふのふぢの花とこそみれ」「ふぢの花いろのおさきもみゆるかなうつろひにけるなごりなるべし」と同語反復がみられる。そして、「みゆる」を共有する五八段二首目と六一段二首目で、「しほ」「浦」「あま」「すなどり」と「ふち」「あさく」「なごり」が縁語的に連関している。隠題に限らず、掛詞で一見すると隠れている語が連関する例は多い。五三段の隠題は短いものであるが、付会とすることはできない。地の文をも巻き込む、意図的な技巧である。

人物名を含む連関は一〇八段から一二四段にも見ることができ、

「袖」「衣手」に涙が「かかる」、すなわち泣くという歌や、「露」が「草」「葉」に「かかる」という表現を使つたはかない命の歌が同語縁語的に連関するなかで、「草」の縁語「たね」「さね」が登場人物名の「さねあきら」「よしたね」「藤原さねき」「さねたうの小式」にみられ、さらに二〇段の歌と地の文に「たね」、一二四段の歌に「さね」の同語反復がある。人物名は、積極的に連関の素材として使われている。五三段「坂上」「遠道」は、姓名ともに連関の語である。

同音反復は、「しも」「山」の語と直接の関連は薄い、四一段の「よ」に端的な特性が表れている。四一段では地の文と歌にさまざまなヴァリエーションで「よ」の音が繰り返されており、歌の提題に対する回答が後詞「よよとなむなきける」で、これが落ちとなる重要な表現である。これが四二段の地の文や四三段の歌に反復して、四三段もまた「よ」の同音語が使われる後詞によつて落着くという、四一段と同様の方法がとられている。四四段の「よからぬこと」は、僧の女性関係またはその噂を指すこととれる。『大和物語』に僧の女性関係は頻出するが、ほかに例のない端的なこの表現が選ばれたのは、連続する「よ」あるいは「よかは」の同音語反復が滑稽感を演出し興味を高めるものだからであろう。『大和物語』の同音反復のこだわりは、掛詞が語数を集約するのとは逆だが、表現意識は通底するものと考ええる。

この同音語反復、あるいは類語反復が「しも」歌話群の諧謔の方法であるが、「しも(霜)」の縁語「おく(置く)」「おき」にもその方法が見られている。⑧⑨では「置き」と「起き」の掛詞、⑮⑯には「置く」「置かじ」の同語が使われている。また、⑩「おく(奥)」は、

先行する⑧⑨の「おき」と同音語的に反復し、⑧の「しも」⑨「つゆ」に縁語的に連関する。これと同様に、⑰「おき」は「沖」と「置き」の掛詞であるが、⑰「おか(じ)」と同音語的に反復し、「しも(霜)」と縁語的に連関する。つまり、「霜」の縁語「置く、置き」について「起き」「奥」「沖」が掛詞になっている。「しも」の語が同音異義語や類義語で多様な表現に展開していると同様、縁語的連関語の「おく」も同音語の掛詞で意味を多様に展開する表現で使われ、章段の区切りを超える連関要素となっている。

また、⑨から⑰の連続は、⑭⑮を除き、「見る」と「聞く」が継続的に反復する。⑩⑬⑯は「色」「見(み)」の同語が反復する。⑩⑬⑭の連続には、「ず(なく)」は「見まし(や)」の同語、同辞反復がある。⑩⑪⑫⑯の「見(る)」の同語反復があるために、⑰の「恨み」と「浦見」の掛詞が強調されている。一方、⑪「よそに見る」と⑬「よそにきく」は、「よそに」の同語を軸に「見る」と「聞く」の対義語によつて表現を転換している。この「きく」は「聞く」と歌の主題「菊」の掛詞である。⑫⑬は「見ぬ人に菊(聞く)を贈る」「よそに聞くだけの菊を見る」という対義語と掛詞を使った地口的な逆転表現が眼目である。⑮⑯の「枝」「花」は注釈書の大勢が何の花と特定しない立場であるが、⑫⑬と登場人物が同じで同語反復の「霜」は菊の縁語であるから、これは菊と特定できる。四九段で花の色がいいと喜んでいた斎院が、五一段では霜でうつろっていると不機嫌になるという内容上の逆転があることを、語の連関から読み取ることができるのである。一方、⑤の「遠(し)」「近(し)」の語は、⑦「道」、五三段の人物名「遠道」、五四段「人の国」、⑲「旅」さらに

五五段「人の国」、五七段歌「をちこち」に縁語、類義語連関するという様相を見せる。このように、連続する語は、関連する語を縁語や対義語で転換することで歌話間の内容を展開したり逆転させたりする役割を担っている。

この歌話群のうち「山」の語を共有する歌は①④⑤⑩⑭であるが、①④⑤⑭では比叡山に限定される。①⑤⑭には「山」の高さを表現するために天象に関わる語「日」「雲」「雲ふ」が使われている。⑩は、④のむしろの歌に同語で連関し、⑭は、①、④または⑤の同語、類義語反復の歌である。つまり、「山」歌話群は、類似した内容、表現の歌が集められ、配置されたものである。また、登場人物の「先帝」という存在に関わって⑦「闇」、⑪「そら」「日のかけ」、⑮「光」などの類義語、対義語が使われている。これに並行して、⑧⑨の「ひ(日)」、⑭「雲」と類義語の連関がなされている。「山」と「先帝」の比喩が類義語連関して、たかき空と日の光のイメージを補強する語を継続させている。これが、⑭で「深き」の同語反復を軸としながら「うみ」に対義語連関するところに、一連の歌話群のひとつの落着がある。

対義語を、一首のうちに対称的に挙げて強調するという使い方は和歌の基本技巧である。また、贈答歌の切り返し目的で常套的に使われる。当該の歌話群では、歌話の連関に使われる対義語は、「うへ・かみ」と「した・しも」のほか、「山」と「里」、「闇」と「光」「日の影」、「遠」と「近」など、多様にみられ、「あか」「しろ」の色の対照も同様の使われ方をしている。前述のとおり、「しらつゆ」の「白」が⑨にあり、それが⑧「あかしつ」を「紅」の掛詞として

対義語に仕立てている。それに連続して、直接的に「あか」「しろ」と表していないが、「色」の語によって、⑩の「紅葉の(紅い)色を見る」、⑬⑭の「菊の花の(白い)色を見る」と、隠れた色名も対義語のような連関をつくっている。「色」の語によって対照させるのは、衣などに関わって、『大和物語』中に頻出するものである。さらに、『大和物語』では、諧謔表現のひとつとして、意外性を演出するために対義語を使う方法が好んで使われるのである。たとえば三八段歌「たまさかにとふ人あらばわたのはらなげきほにあげていぬとこたへよ」では、「海」の歌であるところを、「坂」「原」「木」と、掛詞で陸の語の物尽くしとし、その意外性を諧謔の中心に据えている。同様のねらいで、四三段では、「深き」「山」にいいのか、という問いを承けて、山ならぬ「よ(世)」の「かは(川)」にいと覆って落ちとしている。この「深き」の同語を軸として、⑭は、⑩の「山」「深き」「心」「おく」などの同語反復の連関を作り、⑭で「山」の同語と、「たかき」の対義語を配列し、⑭と、恨まれる、という主題を共有しながら、⑭に「うみ」のような「深き」「心」を「お」くのに恨まれて当惑する、という同語と対義語の連関を作って、類似した歌話群であったはずの「山」を先帝が「うみ」に逆転する諧謔で落着させ、意外性を演出する構成になっている。五二段は、後述するように、古歌の歌句を改変し、先帝の作と虚構したと考えられ、連関の必要上配列された可能性が高い。

当該の歌話群では、二つの中心語、二重線部「山」の連関語と実線部「しも」の連関語がそれぞれ再帰的に現われ、ねじれ、ついに一首中に先行の種々の連関が輻輳するようになっていく。歌話の

ことばが漸層的に移行し、同語、同音語、類義語の反復によっていくつかの特定の語を強調して既視感をもたらし、掛詞、縁語によって意味の転換、内容の展開をはかり、対義語によって逆転させる機知的な構成がなされている。こうしたことばの技巧は、和歌の表現の発想に基づくものである。現在「章段」とされている、登場人物や主題の区切りを乗り越えて、地の文も技巧の素材とし、掛詞によって一見隠れている縁語関係や対義語を配列に利用するなどして歌話を脚色し感興を高めている。複数歌話にわたる連関は、緩やかにまとまって連続でなにかしら落着をはかろうとする目的が表れたものと思われる。このしかけに、『大和物語』の、歌集とも説話とも方法画する、歌物語としての構成の手法がある。

しかし、歌話連統の方法は、あくまでも、ことばの基準だけに限るものではなく、主題や人物の接続もなお、構成の基準である。これらの要素が、単純にひとつの原理としてそれだけで物語を進行させているのではなく、登場人物、主題、複数のことばの連関を、組み合わせた繰り糸として牽引し進行する、機巧となるような方法をみせている。たとえば、四段から一三段では、歌のことばの連関だけでなく、四、五、九、一三段の地の文に「かぎりなくかなし」の一文があり、七段の歌に「かぎり」、九段歌に類義語「はて」がある。¹⁷七段は、歌は、五段歌と同語、同辞反復の類歌であるが、地の文の語の主題は六段の類型である。九段でとしこが間の悪い忌明けの弔間をして未亡人の反発を買い、それを伏線として一三段ではとしこが死んでも弔問されない落ちとなっている。こうした歌話間の内容のつながりは、ことばをきっかけに理解されるもので、機知的な表

現と不可分である。比喻や暗示的な表現など、解釈の精度を上げると、さまざまな連統の要素が加わると考えられる。ひとつの歌話の解釈は、周辺の歌話との照合をしなければ不可能である。

前述したように、贈答歌は、懸歌の同語、縁語、対義語を使って、返歌の方が懸歌に対して相手の言葉尻をとらえ、表現の不備をあげつらい、反発し、否定して、表現のテクニクで相手を凌駕する、という基本的なやりとりの方法がある。そして、『大和物語』の歌話結構と構成方法は多様なものであるが、概括的に方法意識というものがあるとすれば、贈答歌での方法における相手の常識や固定観念への反発、否定、逆転、あるいは予測の凌駕、切り返しの意外さをねらうという意識と相似形をなしているものだと思われる。それが男女、恋愛に限らず、また贈答だけでなく地の文と独詠歌でも、さらに、歌話の区切りを超えて数話にわたる、和歌技巧に基づく遊びをも含んだことばの対応を駆使してなされている。あるエピソードによりそって共感するというよりも、俯瞰的な視点をもってその人物や内容の感興から距離を持ち、辛辣に外側から対象化している。たとえば、歌話の出自が歌語りであり、語り継ぎによって構成の組上にのぼったとしても、歌物語に配列される時点では形を変えられており、ことばは周到に整合し抽象化して配列の中で改めて意味を持つ表現とされている。そうした作業を通じて、享受者の期待する常識や予定調和にとどまらない、それらを逆転して裏切ることが、述作者のたくらみなのである。

五 『大和物語』の改変

これまでの考察の中で、『大和物語』の歌話には虚構や創作が介入する可能性があると考えてきたが、古歌を、読み替え、すり替えのような操作をして物語に取り込んでいるとみられる例がある。たとえば、五二段⑩の異伝が『拾遺集』983に載る。それを前後の歌とともに挙げ、その他の異伝、類歌も併せて載せる。⁽¹⁸⁾

・『拾遺集』恋五 982〜984 題しらず よみ人しらず

近江なる打出のはまのうちいでつつ怨みやせまし人の心を⁽¹⁹⁾

渡つ海のふかき心は有りながらうらみられぬる物にぞ有りける⁽¹⁹⁾
かずならぬ身は心だになからなん思ひしらずは怨みざるべく

・『拾遺抄』恋下 339 題知らず 読み人知らず

わたつみのふかき心はおきながらうらみられぬるものにざりける⁽²⁰⁾

・『古今六帖』四「うらみ」2104 作者不詳

わたつみのふかきころはありながらうらみられぬるものにとぞありける

・『後撰集』恋一 584 詞略 よみ人しらず

わたつ海に深き心のなかりせば何かは君を怨みしもせん

『拾遺集』には、恋の怨みでよく知られている古歌、あるいは作者不明の流行歌のようなものとして撰歌されている。『後撰集』584は『拾遺集』983を踏まえた歌で、第三句「なかりせば」は、「ありながら」の本文をもととして対義語で意味を転換したものである。この歌はもともと『後撰集』成立以前から人口に膾炙していた古歌であったことがわかる。そして第三句の本文は、⑩の「おきながら」よりも、『拾遺集』『古今六帖』所収の「ありながら」の方が優勢であったとみられる。

『拾遺集』983は、前後の連続から、第四句「うらみられぬる」は自発であると解釈できる。『後撰集』584は同じ内容を強調して言い換えていて、「怨み」を自分の心情と表現している。つまり、この歌は、『後撰集』成立以前、「深く愛しているのに怨みの心が湧いてきてしまう」の意を表すとされ、⑩とは意味が異なっている。

『拾遺集』の伝えの客観性に鑑みると、⑩は古歌を出自とするパロディである。いずれかの時点で、古歌と先帝との結びつけという虚構的作業があった。それは、「山」「先帝」歌話群を落着させるものとして巧みに収まっている点から、『大和物語』の歌話制作に近い時点と考えることができると思う。四九、五一一段で、「娘の機嫌を取っていて唐突に恨まれ当惑する先帝」という歌話連続をつくり、それを承けて、本来事実らしい詠歌事情がないこの歌に短い地の文「これもうちの御」を付し、よく知られた古歌を、恋の恨みの自発の心情から、⑩の先帝の歎息を演出する受身の表現へとすり替えて、歌の作者と意味の意外性で落着させている。そのとき、「霜」「置く」というこの歌話連続のなかのキーワードを使いながら、「おき(沖)」

に同音語連関し、さらに「深き山」「たかき」「日」から「深き」「海」へと対義語連関させているのである。「置き」は、海の縁語「沖」との掛詞であるから、当然選ばれ得る語ではあるが、こと⑩に関しては、複数歌にわたるさまざまな「おき」の掛詞の変奏をここでもまたつくるために、「ありながら」ではなく「おきながら」の本文でなくてはならなかったのである。

また、四七段⑩に、「あきやまにこころをのみもいるるかなもみぢのいろのふかきまにまに」(『陽成院』親王姫君歌合『27』)という類歌がある。歌合記録には「あきのはてのころあるふるうた」のひとつとされている。この歌合は、久曾神昇氏が天曆二年の開催かと推定され、⑩はこの古歌を配列の要請に従って組み替え、改変した蓋然性があると考ええる。「あきやま」を「おくやま」とし、「見る」という動詞を加えて反実仮想の構文にすれば、ちょうど当該歌になる。周辺歌話と「山」「心」「色」「深き」の同語を有つうえに、この改変によって、⑧⑨「おき」との同語的連関、⑪「見(る)」との同語連関、⑫⑬との「ずはましまし」の同辞反復、「見(る)」の同語連関、⑭「置か」との同音的連関、⑯「おき」「み(見)」との同語、同音語的連関が加えられているのである¹¹⁾。

歌だけでなく、地の文についても、歌話を史実だと評価できるのかについて再検討を要する例は多数存在する。今回対象としている歌話群の中で、四五段は、『後撰集』に地の文とは異なる詠歌事情の伝えがあり、成立事情にさまざまな議論のある章段である。つきに『後撰集』と『大和物語』四五段の本文を挙げて比較する。

・『後撰集』雑一 1102

太政大臣の、左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日、中将にてまかりて、ことをはりてこれかれまかりあかれりけるに、やむごとなき二三人ばかりとどめて、まらうどあるじさけあまたたびのち、ゑひのにりてこどものうへなど申しけるついでに

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな
兼輔朝臣

・『大和物語』四五段

堤の中納言の君、十三の皇子の母御息所をうちに奉りたまひけるはじめに、帝はいかがおぼしめすらむなど、いとかしく思ひ嘆きたまひけり。さて、帝によみて奉りたまひける

人の親の心はやみにあらねども子を思ふみちにまよひぬるかな
先帝、いとあはれにおぼしめしたりけり。御返事ありけれど、人え知らず。

諸注釈の解釈の大勢としては、『後撰集』の伝えは事実により近いだろうが、本段の伝えのようなリアリティを持った「歌語り」が別に存在し、それが物語に採録されているというところに帰結する。ただし、四五段歌の表現について、『旧評釈』は、「娘の身を案じて天皇に奉る類のものではない。」とし、『新評釈』もこれを踏襲している。『全釈』は、「この歌は、最も個人的な部類のもので、更衣桑子に関わるものとして、天皇によんでさし上げるような歌ではあり

えない。」と、疑義を呈している。この歌については、これらの読み取りが正鵠を射ていると思う。『古今集』『後撰集』時代に歌をもつて哀訴するには、天皇を光に譬える表現は一般的であるが、この歌の「闇」が光を逆転した比喩だとしても、全体の措辞は通常の詠じ方といえない。それにも拘わらず、この歌話がここに配列されている意味を考えると、まず、登場人物の連続として、四八段以降の「先帝」を導入しているという役割を持たされており、『後撰集』の伝えの通りでは「先帝」にながれない。ことばの連関のうえでは、臣下の心の「闇」に対して、四八段に先帝を「日のかけ」、五一段には、帝の恩愛の意で「光」という比喩で対義語連関を作っている。四四段「遠」「近」は、この歌の「道」と縁語的連関をしている。『大和物語』の歌話構成の連続上、この地の文と歌のセットに、人物の連続と、ことばの連関に果たす役割が認められる、ということである。四五段の地の文は、『後撰集』の詞書よりも人物が具体的に特定され、感情の方向が定っており、情趣深いように結構されている。しかし、地の文のひとつつの眼目は、「かしこく(甚だしく)」の語が歌の第二、三句に対応して、「賢く」に同音的に響いて、掛詞のようになっている。諸語が加えられているところにあると考える。四五段は、兼輔の歌を利用して地の文を創作し、先帝歌話群のなかのひとつとした、ということではないだろうか。歌の後詞の草子地は、創作であることの韜晦である。

有名歌の、地の文の語る事情に史実性が薄弱であるにもかかわらず読者の興味をかきたてるというのは、一五五段、一五六段の古歌や『古今集』歌とそれに結びつける地の文の創作方法にもみられる

もので、具体的な地の文があり、それに予想外の有名歌が結びつけられる落差のおもしろさをねらった脚色である。また、よく知られた詠歌事情の歌でも、史実の方を改変した地の文を付し、脚色して伝えている歌話が存在する。²³⁾『大和物語』のなかに歌話が書かれ、配列されるときには、もともなった歌やエピソードは物語内の要請に応じて虚構的に改変されているのである。

六 まとめ

これまでの研究の大勢として、人物や情緒性への興味が『大和物語』を形成しているとされてきたが、大和物語の内実は、ことばへの強い指向性があり、歌話はことばの対応で完結している。言外の悲哀を主題としてはおらず、知的なしかけとその落着が目指されており、ことばによる諸語は歌話結構のねらいの大きな部分を占めている。はじめから情緒的な「あはれ」の話として読み取ろうとすると、ことばのしかけを見失うおそれがある。

歌話の構成には、人物や主題の連続のほか、それらにとらわれない、歌と地の文も含めた、掛詞や縁語の、多様な和歌的表現に基づく連関という方法がとられている。ひとつひとつの歌話の内容にとどまらず、連続においても、贈答歌のあり方にみられる意味のずらし、変奏、切り返し、転覆のような意外性のある落着を目的としている。そのとき、掛詞や縁語、対義語の和歌の技巧をツールとしており、それによって作者本人が意図した内容の外にある意味づけがなされ、連続に意外な感興が加えられている。ひとつひとつの歌話

のことは、連関の中で意味を明らかなものとしている。このような連関の相をみると、歌話は「章段」として個別に独立しているものではないことがわかる。複数の登場人物を作者とする多様な歌と地の文を配列、構成するときに、そうした連関関係を演出するというのが『大和物語』の方法であり、そこにはことばでの「遊び」を追求する独特の文学観がある。

書かれた作品を透視して、「歌語り」という書かれていない営為を指定した豊かな学問の成果を否定するものではない。さらに、実在する数多くの登場人物がさまざまな背景を持ち、成立当時生存している人々も含んだ事実性の濃いであろう歌や事蹟を読むときに、先行研究の史実との照合があつてこそ理解できるものがある。ただ、述作者の書く作業には、事実に基づく語りを筆記したのではない、明確な作為や虚構性、首尾を構想する周到さを読み取ることができると考えるのである。

注

- (1) 柿本獎『大和物語の注釈と研究』昭和五六年には、語彙や詠歌法による章段連続を考える発想が示唆されている。萩野敦子『大和物語』九・十段考——補釈と兩段の連鎖に関する私見』『大和物語研究』一号 平成十二年九月。中島和歌子『言葉の綴れ錦としての『大和物語』——九四段〜九六段を中心に——』『古代中世和歌文学の研究』平成十五年。

- (2) 伊藤一男『大和物語』の言語感覚』『実践女子大学文芸資料

研究所電子叢書Ⅰ 物語史研究の方法と展望』平成十一年。

伊藤一男『笑いの『大和物語』』北海道教育大学語学文学会『語学文学』三九号 平成十三年三月。これらに、大和物語の発想を問い直す視点が示されている。また、『大和物語研究』一、二、三、四号所収の各注釈に、従来の発想に拠らない読み取りの試みがなされている。

- (3) 『大和物語』在中将章段及び周辺章段を読み直す』『国語国文学研究』一三一号 平成十九年三月。

- (4) 為家本を底本に、私に適宜漢字を充て、助詞を補い、歴史的仮名遣いに訂正した。今回の考察は、定家系の本文に基づいている。

- (5) 小稿では次の注釈書を引用し、下の略称で示す。

- ・北村季吟『大和物語拾穂抄』承応二年…『抄』
- ・木崎雅興『大和物語虚静抄』安永五年起稿…『虚静抄』
- ・阿部俊子・今井源衛『日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』昭和三年…『大系』
- ・南波浩『日本古典全書 大和物語』昭和三六年…『全書』
- ・今井源衛『大和物語評釈四五、四六段』『国文学 解釈と教材の研究』昭和三十七年七、八月…『旧評釈』
- ・阿部俊子『校注古典叢書 大和物語』昭和四十七年…『阿部校注』
- ・高橋正治『日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』昭和四十七年…『旧全集』
- ・片桐洋一『鑑賞日本古典文学第五卷 伊勢物語・大和物語』

昭和五十年…『鑑賞』

・柿本奨『大和物語の注釈と研究』昭和五十六年…『注釈』

・森本茂『大和物語全釈』平成五年…『全釈』

・高橋正治『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』平成六年…『新全集』

・今井源衛『大和物語評釈』平成十一年…『新評釈』

・雨海博洋・岡山美樹『大和物語』講談社学術文庫 平成十八年…『学術』

(6) 和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。

(7) 竹岡正夫『古今和歌集全評釈』補訂二刷 昭和五十八年十月

(8) 拙稿『第七十八・七十九・八十段注釈』『大和物語研究』一号

(9) 『大系』『全書』『阿部校注』『学術』は「さはり」に月経の意があるかと注する。一方、『旧全集』『注釈』『新全集』『新評釈』は、「むしも」の本文を、天福本により「鹿も」に校訂している。

(10) 中島氏が(1)で「綴れ錦」という比喻で指摘するように、ことばの連続は、いくつかの「章段」を隔てる場合も多く、必ず隣接の形を取るわけではない。直接的な連続をあえて避け、断続させる場合がみられる。

(11) 新藤協三『大和物語における陽成院のグループについて』『山形大学紀要』八巻二号 昭和五十二年二月。

(12) 雨海博洋『『大和物語』の一条の君』『本位田重美先生定年記念論文集』昭和五十二年、のち『大和物語の人々』昭和五十四年

に転載。雨海氏は、近年『学術』でも、『大和物語』中、もっとも簡潔な章段。人物名と歌だけで、記されているということとは、当時においては、それだけで、その背景となることが了解されていたということになる。」と注している。

(13) 『虚静抄』のみは、「此歌ひとへに秋のみちよめる歎また恋の心をそへたるにや前文見えねばその心はかりかたし」とする。

(14) 萩野氏(1)では、章段を「語りつなぐ」という表現意識があるという発想により「連鎖」とするが、小稿では構成意識を考えるため、「連関」と称する。また、中島和歌子『大和物語』第三段をめぐって——清蔭歌の特徴と地の文の貢獻——『大和物語研究』一号 平成十二年九月には、地の文が歌の同語、類語、対語、縁語を先取りし、歌を効果的に演出することが示されている。

(15) 拙稿『第四十八・四十九・五十・五十一・五十二段注釈』『大和物語研究』一号 平成十二年九月。

(16) (15)に同じ。

(17) 萩野氏(1)に、このほかにも八段から一六段に多様に同語、縁語、対義語の連鎖が含まれていることが示されている。

(18) 『寛平御集』8に、詞書「霍公鳥をきこしめして」三行分空白「わたつうみのふかきこゝろとしりなからくも(三字分空白)おるゝはわりなかりけり」が載る。また、『評釈』に、『寛平御集』異本の『亭子院御集』8番歌「わたつみのふかきこゝろとしりながらうらみらるゝわびしかりける」があると報告

されている。諸注が四八段以降の「先帝」を宇多天皇とするのは、五二段歌が『寛平御集』『亭子院御集』に載ることを根拠としている。私案では、これらの御集は『大和物語』を承け、さらに作者「先帝」を宇多天皇と判断してこの歌を採録したものと考えているが、その確証は得られていない。

- (19) 片桐洋一『拾遺和歌集の研究 校本篇』に挙がる諸本では、第三句の異同は報告されていない。

- (20) 片桐洋一『拾遺抄——校本と研究』によると、貞和本では第三句「ありなから」とし、右に合点して朱で「ヲキ」と傍書している。

- (21) このほかにも、③の類歌「宮つくるひだのたくみのてをのおとほとほとしかるめをも見しかな」(『拾遺集』雑恋部 1226 詞書略 国用)、④の類歌「なにはかりふかくもいらすあしひきのひえをとやまとおもふはかりそ」(『遍昭集』書陵部藏本 54)、⑥の類歌「ぬれぎぬをいかきざらん世の人はあめのしたにしすまなかざりは」(『拾遺集』雑恋部 1216 題しらず、よみ人しらず)、⑫の類歌「きても見ん人のためにとおもはずはたれかからまし我が宿のくさ」(『新撰和歌』106)がある。それぞれに『大和物語』所収歌とのなんらかの関連が考えられるが、影響関係が客観的に明らかにならないので、紹介するにとどめる。

- (22) (15)に同じ。諸注、「春日のかげ」は、刑部君をたとえたとするが、天皇自身のこととみる。

- (23) (3)に同じ。

- (24) 拙稿「『大和物語』第九十九段の問題点——和歌第二句の本文と大井行幸の年次をめぐる——」『大和物語研究』二号 平成十四年十月。大井行幸の年次が脚色されていることを指摘した。

(付記) 小稿は、大和物語輪読会平成二四年六月例会での発表をもとに起稿した。席上、多くの助言を受けたことに深く謝するものである。

(おの よしこ・北海道大学大学院修士課程修了)